

シンポジウム

3. 当院における高気圧酸素療法の診療連携

田村裕昭 川島真人 高尾勝浩
 田中道治 中村英助 前川和道
 藤川陽祐 春島正美 津末輝彦
 (川島整形外科病院)

当院は、現在ベッド数100の整形外科の単科専門病院であるが、高気圧酸素療法は、1981年開院当初は1人用高圧治療装置を用い、1984年に2種大型高圧治療装置を導入、さらに1989年にはさらにもう1基大型治療装置を導入し治療に従事している。現在までの症例数は約1000例で、急性の脳梗塞や脳血栓症348例、減圧症158例、骨髄炎150例、閉塞性動脈硬化症64例、以下、広範囲圧挫減創、難治性潰瘍、突発性難聴、脊髄神経疾患、バージャー氏病、一酸化炭素中毒等の順となっている。2基目の大型高圧治療装置の導入で、減圧症、一酸化炭素中毒、ガス壊疽等の緊急を要する疾患に対し、いつでも治療を行えるようになった。

単科専門病院においては、地域住民の高気圧酸素療法への理解を高めることがまず必要であり、高圧酸素治療用のパンフレットの配布や、院内報を通じて診療や活動の内容の公開を努めて行っている。又、高圧セミナーや高圧懇話会を開催することは、地域医家への認識を高めるのに役立っており、近年、血行障害による難治性潰瘍や突発性難聴等の治療依頼も増加してきている。

急性の脳梗塞や脳血栓症に関しては、近くの脳外科と連携し、脳外科入院にて専用車で送迎し連日外来通院加療をしている。

減圧症治療に関しては、当院では職業潜水士が殆んどであるが、発症後は潜水士が直接医師と連絡を取り、速やかに来院する体制をとっている。又、漁協と連携しての検診や講習会を行ったり、来院患者には教育ビデオを見せたりして、潜水士の減圧症への理解と予防及び治療の必要を啓蒙している。

当院における診療連携の現況を紹介するとともに、問題点や今後の展望について報告したい。

シンポジウム

4. 「高気圧酸素療法の診療連携」総合病院について

辛 龍雲 八木博司 荒木貞夫
 中村英文 河津好宏
 (福岡八木厚生会病院)

当院は人口120万を擁する福岡市において高気圧酸素(HBO)治療装置を有する唯一の施設である。昭和46年から、平成元年末までの19年間に1,985例に対して延べ25,858回のHBOを行った。その年次推移をみると、初期の1人用小型治療装置を用いた昭和46年から56年までの11年間は年々症例数、治療回数ともに増加し、昭和55、56年は年間の稼働件数が約1,000件を数え1人用小型治療装置の限界に達した。そこで多人数用大型治療装置が導入され、年間症例数は200例前後とほぼ一定となり、現在に至っている。HBO症例のうち、院内・外の患者比を過去5年間でみると院外患者が2/3で院内患者よりも多い。転送してきた施設は大学病院から一般開業医までさまざまであるが、大部分の紹介患者は本院との関連施設からである。紹介患者の主な疾患は、突発性難聴、熱傷、イレウス、脳梗塞、ミエロパチー、糖尿病性網膜症、末梢血管疾患と多方面にわたっている。

HBOに関連する一切の事項については、当院においてHBOを開設した現院長が最高責任者として処理している。例えば他施設からのHBO依頼については院長が窓口となり、受け入れに対応している。又、HBOに際して医師の管理が必要な場合には、院長自ら治療に付き添い不慮の変化に対処している。当院におけるHBOの問題点は、HBOを運営管理する医師が院長一人であり、未だその後継者がいないことである。さらにHBOに関するデータを集計管理する専門のスタッフがいないため、これらのデータが、迅速かつ有効に用いられていないことである。これらを解決するためには、治療法としてHBOの有効性を医師のみならずパラメディカル及び病院職員にまで徹底させ、HBOに対する関心を喚起することが重要であると考えられる。